

## 未完の近代個人主義

— デュルケームにおける実践プランの変遷 —

津 田 真 人

### 序論 デュルケームと個人主義

デュルケームが近代個人主義思想の熱烈な信奉者であったことは、今や常識である。<sup>(1)</sup>だがそれは、なお依然として逆説的に聞こえるかもしれない。第一に彼は「近代」を礼讃していただろうか。むしろ近代社会の現状に深い危機意識を抱き、とりわけその集中的表現たる「エゴイズム」と「アノミー」をいかに克服するか、終生全エネルギーを傾注しつづけたのではなかったか。第二に、個人に対する社会の優位を説くはずの「社会学主義」者デュルケームが、どうして「個人」主義などを信奉するだろうか。彼にとってはいいつも、

全体はその部分の総和を超えるのではなかったか。

けれどもまず第一の点に関して、次のことに注意せねばならない。デュルケームが近代の現状を批判するとき、それは近代以前の外的原理によってではなく、近代自体のありうべき最良の原理を対置することによってなされた批判であったことを。近代以前の原理が解体したために「エゴイズム」や「アノミー」が蔓延するようになったのではなく、近代固有の原理が十分根づくに至っていない事実が元凶なのだ。いいかえれば、「エゴイズム」や「アノミー」といった危機は、デュルケームにとって、近代個人主義とそのまま等置されるべきものではなく、むしろ近代個人主義が本来の

姿から跛行し、過度に進展してしまつた形態にほかならない。ここには、近代個人主義原理そのもの、つまり《適度の》個人主義と、その跛行形態である「エゴイスム」および「アノミー」という現実、つまり《過度の》個人主義との区別が、暗黙のうちにある。<sup>(2)</sup>

とすれば問題は、近代個人主義を肯定するか否定するかではなく、近代個人主義をいかにして真に根づかせ定着させるか、いいかえれば《過度の》個人主義をいかにして《適度の》個人主義に是正するかにあつたのでなければならぬ。デュルケームの学的生涯はまさしくこの解答を求めての苦闘なのであつた。

しかし、原理としての《適度の》個人主義が、現実の世界においては《過度の》個人主義としてしか実現していないとすれば、そこにはそうさせた一定の現実的条件があるはずだ。ここで先の逆設の第二の点が関わってくることになる。

実はデュルケームにとって「個人主義」とは、これもまたひとつの社会的現象なのである。人間的個人の人格を尊重する価値規範として「個人主義」は、社会

の、なかならず近代社会の産物である [D. T., pp. 138-42, 146-7; S. D. v., p. 79; S. n., p. 382; L. O., p. 144; S. S. q., p. 271; E. S. q., pp. 98-100]。 「個人主義それ自体は、あらゆる宗教や道徳と同様に、ひとつの社会的産物である。」 [S. S. b., p. 275 n1]。ここに、社会学者デュルケームが同時に個人主義の信奉者でもあるという、一見奇妙な取り合わせの謎を解く鍵がある。

さてそうなると、個人主義が本来の《適度な》形になるか、跛行して《過度な》形になるかの帰趨を握るのは、社会的な次元でなければならぬはずだ。《過度な》個人主義を《適度な》個人主義に是正する実践プランとしては、当然何らかの形で社会変革が要請されるのでなければならぬ。

先取りに言うならば、彼は大きく言って四つのプランをほぼ継起的に提示していくことになるだろう。<sup>(3)</sup>

デュルケームは、自ら肯定する《適度な》近代個人主義を、どのように実現しようとし、あるいはできなかったらうか。本稿で考えたいのはこのことなのである。

## 第二節 社会の重層的把握

そこです、デュルケームの社会観を確認しておくのが順序になろう。皮肉なことに、〈社会的事実を物として扱え (traiter les faits sociaux comme des choses)〉という、『社会学的方法の規準』で述べられたあのあまりにも有名な方法論的テーゼは、当のデュルケーム自身の社会学思想の真意を歪める結果をもたらしてきた。実際には、デュルケームは何も社会を、凍りついた堅固な物体のごとくに考えていたのではない。こう宣言されたそのほかならぬ同じ書物の中でさえも、彼のいう「社会的事実 (fait social)」とは、結晶化の度合だけを異にし、断絶なく互いに連続的に移行する、次のような諸水準の重層的な編成体だったのである [RM, pp. 5-19]。

(a)「構造的諸事実 (les faits de structure)」「形態学的事実 (les faits morphologiques)」「社会的基体 (le substrat social)」に関わる社会的事実」などとよばれるもの。——具体的には、社会を構成している基

本要素の数や性質、それらの配置様式、融合の度合、特定地域上の人口分布、交通路の数や性質、居住の形態など、「社会の密度と容積」と呼ばれるものがこれにあたる。

(b)「組織化された信念や慣行 (croyance et [...]) pratiques constituées)」もしくは「結晶化された諸現象 (formes cristallisées)」——具体的には、法の規則、道徳的格率、宗教的教義、金融制度等々である。

(c)「社会的潮流 (les courants sociaux)」——いわば明確に組織化されていない信念や慣行。そしてこれには、さらに次のような二つが含まれる。

(c)「世論の動向 (mouvements d'opinion)」——より持続的で、全体社会レベルにおいてもより限定されたレベルにおいても、宗教、政治、文学、芸術などをめぐる、たえずわれわれのまわりに生起している潮流。

(c)「一時的な暴発現象 (explosions passagères)」——個々の集合態ごとにだけ突発的に生じるような、熱狂や憤激や憐憫などの一時的な潮流。(a)が「構造

(structure)だとすれば (c) は「生 (vie)」であり、(a) が「器官 (organe)」だとすれば (c) は「機能 (fonction)」である。

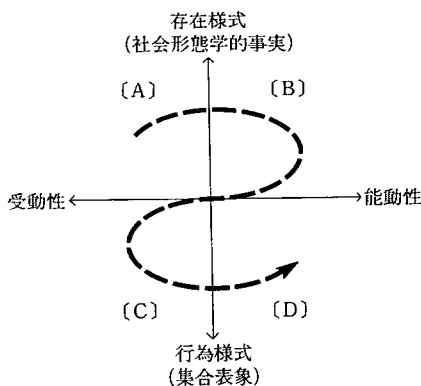
「こうして、最も明確な特徴をもつ構造的諸事実を、まだいかなる確固たる鑄型にもはめこまれていない、社会生活のこれらの自由な潮流へと、断絶なく連続的に結びついている微妙なニュアンスの差をもった諸段階が、存在していることになる。したがって、それらの諸事実の間には、凝固化の度合に差異があるのにすぎない。両者は生の結晶化の度合の大小を意味しているのにすぎないのだ。」[R. M., p. 19]

結晶化の度合に応じて、一方には、構造的形態的事実 (a) に相当し、「社会形態学 (morphologie sociale)」[R. M., p. 100] の対象とされる「存在様式 (manière d'être)」の極があり、他方にはそれに対して、残りの全領域 (b ~ c) に相当し、後に「社会生理学」とよばれるものの対象となる「行為様式 (manière de faire)」つまり生理学的な社会的事実の極がある<sup>(4)</sup> [S. S. R., pp. 148-51]。

後者の極はまた、最も広くとられた意味での「集合象」である (厳密には (b) はむしろ集合象が視的に顕現化した諸形象と考える方が正確だが)。社会的事実を刺し貫くこの二つの極、すなわち存在様式と行為様式、社会形態学的事実と集合象、あるいは誤解を恐れずに言えば社会構造と意識、これらの関係の問題はデュルケームに生涯つきまわっている。これをデュルケーム流の土台—上部構造論とみなす論者も決して少なくないほどだ。<sup>(6)</sup>

ただしデュルケームの土台—上部構造論は、「土台とその上部」と形容するにはあまりに双方向的である。たしかに「土台」(社会形態学的事実) はその確固たる構造によって「上部構造」(集合象) の動向を制約し条件づける。しかしもととはといえば「土台」(存在様式) 自身、流動的な「上部構造」(行為様式) の渦巻きが凝固し結晶化した状態にすぎない。流れが結晶を生むという点では、わきたつ集合象の方を「土台」と呼ぶことも、等しく可能であろう。

だとすれば論理的には、ひとつの社会を存在様式



(社会形態学的事実) から行為様式(集合表象)の方へ向けて説明することもできるし、行為様式(集合表象)から存在様式(社会形態学的事実)の方へ向けて説明することもできる。現にデュルケム自身、これら二つのアプローチのいずれをも利用したのであって、大まかにいうなら、初期においては社会形態学的事実(存在様式)を「土台」とする説明方式を、後期においては集合表象(行為様式)を「土台」とする説明方式を、それぞれ採用する傾向にあった。この転移はしか

し、事柄の性質上、個人主義原理の定着によって近代の危機を救おうとするデュルケムの実践プランの変遷に、そのまま連動せずにはいないだろう。

### 第三節 四つの実践プランとその変遷

ところで、デュルケムの社会変革に関する実践プランを考えるにあたって忘れてならないのは、彼が変革の対象のみならず変革の主体をもまた、「社会」とみていたことである。デュルケムは、「社会構造に對する個人の自由」というような陳腐な図式だけで実践論を構想していたのではなかった。実践を担う主体はつねに、個としての個人ではなく、集团的・社会的なものである。「ひとが社会に對して効果的に働きかけることができるのは、諸個人の力を集めることによつて、集合力に集中力を對置するときだけなのである。」

[F.M. p. 71]

だが問題は、その集合力なるものが、諸個人の側から自発的・能動的に興隆するものなのか、上からもしくは機械的必然によつて、受動的に与えられるものな

のかにある。しかもこの能動性と受動性の対立は、前節でみた集合表象と社会形態学的事実の対立とは必ずしも重なるとはかぎらない。すると論理的帰結として、図のように四通りの実践プランの可能性が導き出されるはずである。事実デュルケームは、この四つを順々に提起して行くことになる。

「A」「有機的連帯」。まず『社会分業論』（初版）では（一八九三年）、形態学的事実の必然的な決定性のもとに「すべては機械的に起こる（Tout se passe mécaniquement）」[D.T, p. 253]と主張されるため、理想としての有機的連帯の実現が、人間の能動的な行為のはいりこむ余地のはっきりしないままに、比較的客観的に予測されることになる。すなわち、近代化とともにますます支配的になりつつある分業が、このまま滞りなく先に進んで、その本来的な姿を余すところなく開花させるならば、「個人的人格」の確立と「人間の友愛の理想」の実現をとにもたらすことができるだろうという、惰性的な未来像が展開されている「D.T, pp. 398-402」。したがってその意味では、『社会分業論』

（初版）における「有機的連帯」論は、固有の意味での実践プランとみなすこと自体、無理があるかもしれない。

たしかにデュルケームは、次のように言っている。  
「機械論的社会観（conception mécaniste de la société）<sup>(7)</sup>は理想を排除しはしないのであって、それを、人間を自分自身の歴史の無為な目撃者にすぎない存在にしてみようと非難することは、まちがっている。[……]すべてが法則に従ってなされるからといって、われわれが何もする必要はない、などということにはならないのである。」[D.T, p. 331]

それならわれわれは何をなすべきなのか。このことについて、『社会分業論』の初版は、結局何ら明確な解答を示しはしない。実際デュルケーム自身、後に同書の「第二版序文」（一九〇二年）のなかで、この客観主義的な客観論<sup>(8)</sup>について、有機的連帯が自生的に成長してくるかのようなイメージを強く出しすぎた、と自ら自己批判することになるのである。<sup>(9)</sup>そしてかりに自生的に成長するとしても、それは「ある集団」が、有機

的連帯にふさわしい「行為規範」をそなえるときだけだ、という条件をつけて、譲歩を示すに至る「D.T.p.」<sup>9)</sup>。

そしてこの「ある集団」こそ、次に見る「同業組合」なのである。すなわち有機的連帯は、単に歴史法則の惰性的・自生的な帰結ではなく、その《結節点》<sup>10)</sup>を、人々が能動的に創出することによってはじめて、存立しうるものなのである。

「B」新しい同業組合と国家。デュルケームの同業組合(corporation)論は、実はすでに一八八九年に、『社会分業論』の第二章稿のなかに胚胎し、一八九二年にははっきりと講義録に形をとどめるに至ってさえいるにもかかわらず、『社会分業論』の初版(一八九三年)<sup>(1)</sup>の行論にはまだ十分に生かされず、『社会主義論』(一八九五—六年の講義録)から、『自殺論』(一八九七年)、『社会学講義』(一八九八—九年の講義録)を経て、『社会分業論』「第二版序文」(一九〇二年)に至る、ちょうど世紀の変わり目頃に、集中的に追究されている(もっともデュルケームの生前に活字となった

のは、このうちの二つだけである)。

同業組合論においては、先の機械論的(mécaniste)歴史観と同様、まずは形態学的事実の説明上の優先性と因果的決定性が一応認められている。しかしそのうえで、まさにそれゆえにこそ、「社会構造を再編成しなければならぬ」という考え方に比重が移っており「Su. p. 446」<sup>6)</sup>もはや単純に機械論的歴史観に帰着せず、社会構造への人々の能動的介入を唱える点で、『社会分業論』の初版とは基本的に立場を異にしている。

その際、いわば切札としてもちだされるのが同業組合なのである。同業組合は、一方では、産業社会で最も恒常的で最も具体的で最も人々の生活を包括する「ひとつの集合的人格 (une personnalité collective)」として、エゴイスムを抑制しうる「唯一の集団」たりうる。他方では、強者と弱者の権利義務関係を調整し、生産と物質的欲望を規制し、病的過熱状態に陥るのを防ぐことによって、アノミーを克服することもできる。「Su. p. 435-40」同業組合の能動的な創出こそがエゴイスムとアノミーを克服し、《過度の》個人主義を

《適度の》個人主義に押しもどし、そうして有機的連帯の理想をも実現させてくれるであろう。

ただし同業組合は、あくまで個人主義という社会全体の集合的理想を体现する、有機的連帯の《結節点》である。同業組合は、固有の個別的利害に拘泥するあまり、個人的なエゴイスムにかわる新たな「組合エゴイスム (négoisme corporatif)」に陥るのであってならなく [S. n., p. 439]。この意味では、同業組合が「国家の一般的な作用」[D. T., p. xxx] のもとに服することもひとまず必要かもしれない。けれどもだからといって、同業組合が国家の一般的な作用のもとに吸収されつくしてしまったのでは、わざわざ同業組合を再建などする必要もないだろうし、かえって危機の原因を助長する結果とさえなってしまうだろう。

デュルケームにとって今日の道徳的危機は、同業組合に代表される中間集団の欠如のために、肥大化した国家とバラバラの諸個人が直接対峙するという「社会学的怪物 (monstruosité sociologique)」[D. T., p. xxxii]、このいわば先駆的な大衆社会論的状况にあっ

た。反対に、国家と同業組合とが互いに相対的自立性をもちながら共存するなら、各々が有効に機能しあい、また両者の拮抗のいわば漁夫の利として、個人の解放も実現するだろう [L. s., p. 39]。

デュルケームはこの危機の根源をフランス革命以来の過渡的状况として把握している。彼にとってフランス革命は、一方では、ほかならぬ近代個人主義思想の原点として、断じて否定されるべきものではない。他方しかし、フランス革命は国家が同業組合を吸収してしまっただ点で、唯一の、だが決定的な欠点をはらむものである [S. n., p. 447-8]。この観点から言えば、デュルケームの実践的目標は、フランス革命の掲げた理想を、フランス革命の惜しむべき難点を克服することとおして、貫徹し完成させることにはかならない。

この文脈で同業組合に焦点が集まってくるわけである。しかしながら問題は、これほど重要な位置を占める同業組合を、具体的に誰がいかにして設立するのかについて、何らの示唆もなされていないことだ。そのため現実の世界では、同業組合の設立の試みは、人々



の習俗のレベルにまで根をおろすには程遠かった。なるほど、軍人、教師、司法官、行政官、弁護士、僧侶などには、凝集度の高い職業集団がすでに成立している。しかし最も肝腎な経済界については、まだほとんど同業組合は生じていないというのだ〔L.S., p. 48; D.T., p. 3〕。そこでデュルケームは、現実の条件の中で同業組合を打ち立ててゆくには、まだ何か足りないうという当然の焦燥に、駆り立てられてゆくことになる。

〔C〕教育の重視。若いころから教師を志望し、ボルドー大学でもソルボンヌ大学でも教育学の講義を続けたデュルケームであつてみれば、教育に対する関心は、ほぼ生涯を一貫したものであつたらう。けれどもここで重要なのは、『道徳教育論』や『教育と社会学』でよく知られる、二〇世紀初頭のデュルケームの教育論が、今しがた見たように、同業組合に期待するだけでは問題が解決しないことへの、一種の焦りに裏打ちされて取り組まれたものであることだ。

実際いささか意外なことではあるが、教育はもともと

と初期のデュルケームにおいては、むしろネガティブに扱われてさえた。『自殺論』によれば、教育は社会を表現する受け皿にすぎず、社会が悪ければ教育も悪いだけであつて、教育によって、いきなりよりよい社会を創造することはできなく〔S.n., pp. 427-8〕。それよりも社会構造全体の变革を先行させるべきだと主張されていた。

ところが、同業組合の寂しい現実を見るにつけ、デュルケームは次第に教育を重視し始める。同業組合設立の試みが根づかない理由を彼は、そもそも現代のフランス全体が、「協同精神」を欠いてしまっている事実を求める〔E.M., p. 198〕。魂なき制度的形象は、生ける屍でしかないからである、と。むしろこのような協同精神は、他のいかなる精神とも同様、天から降ってくるものではない。あくまで現実の一定の媒介集団の中で涵養されるものだ。だがそうなると、われわれは必然的に、〈結社 (association) の再生は協同精神 (l'esprit d'association) の再覚醒によってのみ起こり、協同精神の再覚醒は、すでに現存する結社のなかにお

いてのみ起る」というような「循環構造 (cercle)」  
[EM, p. 202] の中に投げ入れられてしまう。

この循環構造を突破するために、期待を賭けるべき  
現存する唯一の媒介集団としてデュルケームがあげた  
のが、学校集団だったのである [EM, pp. 199-200,  
202-3]。たしかに協同精神は、社会生活や人間関係の  
なかで放っておいても、部分的には、自然に身につい  
てゆくものだ。けれどもすべてではないし、時  
間もかかりすぎるし、また偶然のおもむくままに委ね  
るしかなくなってしまふ。かわりに学校によって、こ  
れを「方法的に組織化」しようというのである [EM  
p. 236]。

こうして、実践プランとしての教育論は第一に、同  
業組合論の場合とはちがって、制度の設立そのもの  
(形態学的事実の改革) よりもむしろ、それに先立っ  
て、制度を生かす魂 (集合表象) の方に、実践的関心  
のアクセントが移動している。

しかし第二に、そのこととひきかえに、魂を担う制  
度そのものについては、既成の制度を所与の前提とし

て措定せざるをえなくなる。したがって集合表象は、  
教育の現場において、大人から子供へと注入されるべ  
きものとして捉えられている。「若い世代の方法的社  
会化 (une socialisation méthodique de la jeune gén-  
eration)」 [ES v, p. 51; ES d, p. 102] とこうわけ  
だ。

しかし、そもそもデュルケームにとって、制度とは  
集合表象の流れの「結晶化された諸形象」にほかなら  
ないのであったから、現存する制度といえどもやがて  
は風化し、生ける屍となり果てる宿命にあるはずだ。  
そのためデュルケームの実践論は、この受動性のレベ  
ルにもとどまっていられなくなる。既成の制度への  
依存を脱して、教育論はさらに、集合表象そのものの  
能動的創出をめざす集合的沸騰論へと昇華されてゆく  
のである。

『D』集合的沸騰の再生への期待

「価値判断と事実判断」(一九一一年)や『宗教生活  
の原初形態』(一九一二年)においては、価値としての  
集合表象が、非日常的な集合的沸騰のなかで形成され

ることを、デュルケームは強調するようになる。すなわち、制度そのものよりも制度の魂を重視する傾向が、まず教育論から継続されるとともに、新たにそこに能動的な要素が付け加えられる。理想はもはや、外側からであれ上からであれ、注入される性質のものではなく、人々みんなが参加する集合的沸騰のなかで、能動的に形成されるものである。

すでにみたように近代個人主義は、フランス革命とともに開示された。フランス社会に渦巻いていた「個人主義に対する社会的アスピラシオン」[J.S., p. 95]が革命政治を導き、その革命的事業の方針を決定することによって、たとえば「人権宣言」を結実した。しかし宣言こそされたが、こうしたアスピラシオンは革命後十分に定着することなく〈過度の〉個人主義を引き起こし、明確に意識されぬまま放置されている。

そこでデュルケームは、これまで文明の基礎をなす偉大な理想が創造されたどの時代とも同様に「S.P.b. p. 115」、フランス革命に続く「創造的沸騰の時代」が再生することに期待を高めるようになっていくのである

る「F.E. p. 611」。フランス革命が唱導した個人主義の理想を、人々ひとりひとりが身をもって、自発的・能動的に、集合的沸騰の中で幾度でも感得しなおすことをとおして、〈過度の〉個人主義ではなく本来の〈適度の〉個人主義が、おのずからやむにやまれぬ欲<sup>アスピラシオン</sup>として確認されてゆくからである。

そして、社会主義運動の興隆とドレフュス事件での広範な大衆の動きとは、そのようなデュルケームに希望と確信を抱かせる予兆を秘めた出来事だった。たしかに現状は、表面上は不安で陰気に満ちた「道徳的冷え込みの時代」かもしれない。けれども「漠としたアスピラシオン」が、社会の深層に、マグマのごとく出口を探し求めて煮えたぎっている「S.S.p. pp. 312-3」。これがやがて人々にはっきりと意識化され、一定の表現に定式化され、近代社会の中核的原理として結実するときに到来するだろう。

「重要なことは、われわれの集合生活の表面を支配している道徳的冷え込みのなかに、われわれの社会が内蔵している熱源を感得することである。さらにふ

みこんで、社会のいかなる領域でこれらの力が形成されつつあるかを、やや明確に言うことさえできる。それは人民階級 (classes populaires) のなかにである。」

[USSP, p. 33]

新しい理想を求めて、人民階級が集合的沸騰をおこすような状況は、ふつう何と呼ばれているだろうか。

——いうまでもなくそれは革命である。デュルケームが革命を煽動しようとしていたかどうかはともかく、少なくとも彼が、近代個人主義の建設を人民階級自らが能動的に推進する集団的、主体的、あるいは集団的、主体性ともいべき地平に立って模索するに至ったことに、まちがいはないだろう。<sup>(13)</sup>

人々はいまや、社会の変動を受動的に被るのでもなければ、新しい価値を受動的に注入されるのでもない。少なくとも時代の変わり目には、積極的に社会変動に介入し、新しい価値の創造に参画しさえする。その種子は、人民階級ひとりひとりの内奥に、「アスピラシオン」の形で眠っている。<sup>(14)</sup>

### 考察

以上われわれは、デュルケームの実践プランの変遷とともに、形態学的事実—集合表象、能動性—受動性の二つの基軸が織りなす座標系の、四つの象限を螺旋状に走り抜けてきた。

要約するなら、一方では、それぞれの実践プランを実現すべき領域が、形態学的事実や制度的諸形象の結晶度の高いレベルから、それを生成し活性化する流動的な集合表象のレベルへと移行している（螺旋の垂直軸に相当する）。有機的連帯論（A）と同業組合論（B）が、形態学的事実による集合表象への作用力を重視して、社会構造の変革の方をまず前面におしだしたのに対して、教育論（C）と集合的沸騰論（D）は、集合表象による形態学的事実への作用力を重視して、まず集合表象が定着しうるような実践論を提起している。これは、デュルケーム自身の双方向的な「土台—上部構造論」における解き口の変化に、正確に対応するものである。

他方では、それぞれの実践プランにおいて、人々の能動的な働きかけの度合が次第に大きくなっていく。

有機的連帯論(A)よりは同業組合論(B)の方が、教育論(C)よりは集合的沸騰論(D)の方が、諸主体の積極的な参加をせまるものである(螺旋の水平振幅に相当する)。こうして晩年に至れば至るほど、デュルケームは社会を、より流動的に(形態学的事実から集合表象の潮流へ!)、より能動的に(機械論的歴史観から集団の主意主義へ!)把握するようになる。その頂点にあるのが集合的沸騰論である。

ところで第一に、このような変遷が存在するからといって、後の段階がそのつど前の段階を否定しながら登場してきたかのようにみなしてはならない。むしろ前のプランをよりよく実現させるための条件を求めて、デュルケームから見てもより深部と思われる水準へと遡行して行ったと考える方が正確であろう。有機的連帯の実現のためには同業組合の確立を、同業組合の確立のためには協同精神の教育を、協同精神の教育のためには集合的沸騰による集合的理想の形成を、という具

合にだ。したがって逆に、集合的沸騰による個人主義原理の定着は、まさに有機的連帯が実現するための、最も根底的な必要要件ということになる。『社会分業論』のテーゼは、最晩年の『宗教生活の原初形態』を包むことなしに、完結しはしないのだ。

しかし第二に、デュルケームの社会の双方向的な編成を想起するならば、最深部に見いだされた集合的沸騰による集合的理想の形成自体がまた、社会形態学的事実によって条件づけられ枠づけられているのでなければならぬはずである。かくしてわれわれは振り出しに引き戻される。開かれた螺旋は八の字形に閉じられ、悪無限的に循環する——ちょうどデュルケームがすでに教育論において直面した、あの「循環構造」と同じように。

現に《適度な》近代個人主義は、今もって人々のうちに、ゆるぎなく定着するに至ったとはいいがたい。「エゴイズム」と「アノミー」の危機は今日ますます切実な問題となるばかりであって、それは《適度な》個人主義の実現プランが現実化の糸口をつかみえていな

い、何よりの証拠と思われる。「循環構造」を出口のない堂々めぐりから救い出すには、何が必要だろうか。

四つの象限すべてを瞥見してきたわれわれにとつて、今や教育論のときのように、すでにあるもう一方の座標極に逃げ込むわけにはいかない。逃げ込むべき象限など、もはやひとつもない。だとすればむしろ、四つの実践プランが下敷きにしていた「暗黙の前提」そのものが問い直されるべきではないか。《適度な》個人主義の実現手段以前に、その内容の捉え方に、どこか無理はなかっただろうか。実践プランが達成すべき理想を、《適度の》個人主義と《過度の》個人主義の区別という仕方では語らねばならなかったところに、実は陥穽があったのではないか。このことがただちに稿を改めて論じるべき主題となろう。

(1) この視角を世に知らしめた、最も代表的な著作は、次のものである。Giddens, A., *Capitalism and modern social theory*, 1971. 犬塚先訳『資本主義と近代社会理論』研究社、一九七四年。Lukes, S., *Emile Durkheim: his life and work: a historical and*

*critical study*, London: Allen Lane, 1973. 宮島喬『デュルケーム社会理論の研究』東京大学出版会、一九七七年。

(2) デュルケームは厳密には「個人主義」を、進歩主義、平等主義、合理主義(もしくは知的個人主義)、の三つに分けて考えていたように思われる。進歩主義は物的環境における個人主義、平等主義は社会的環境における個人主義、合理主義は精神的環境における個人主義であって、これらが《適度に》機能している限りは、個人主義は「人間崇拜 (culte de l'homme)」[*son*, p. 268] という最も理想的な形態として存在する。他方、進歩主義や平等主義が《過度に》展開して「物質的幸福の神格化 (apothéose du bien-être)」[*son*, p. 284] に陥ったものが「アンニー」合理主義が《過度に》展開して「自我崇拜 (culte de moi)」[*EM*, p. 61] に陥ったものが「エウイヌム」である。

(3) 以下の整理と似た整理を、ちがった角度から行なっているものとして、Marks, S. R., *Society, Anomie and Social Change: An Interpretation of Emile Durkheim's Sociology*. Doctoral dissertation (Ph. D.), Boston University Graduate School, 1971, Xerox University Microfilms, n° 71-26451; Durkheim's Theory of Anomie, in *American Journal of Sociol-*

ogy, vol. 80, no. 2, 1974, pp. 329-63. しかしこのこの考察は、それとはまったく独自の「デュルケムとの対話の中からつむぎだされたものである。

(4) この社会形態学、社会生理学に、社会学のいわば哲学的部分である一般社会学を加えたものが「デュルケムの社会学体系である」[*op. cit.*, pp. 151-52]。

(5) Lukes, S., *op. cit.*, p. 236.

(6) Gouldner, Introduction to Durkheim, E. *Socialism and Saint-Simon*. Ohio: The Antioch Press, 1958, p. xiii; Cuvillier, A., Durkheim et Marx, dans *Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol. 4, 1948, pp. 92-4; Emile Durkheim et le socialisme, dans *Revue Socialiste*, vol. 122, 1959, p. 39.

(7) 念のために確認しておくが、「機械論的社会観」というときの「機械論的」なる表現は、「有機的連帯」の対概念として「機械的連帯」というときの「機械的」なる表現とは、全く別物である。

(8) パーソンズはこれを「社会学的客観主義 (sociological objectivism)」と訳している。Parsons, T., *The Structure of Social Action*, 1937, 2nd. ed., New York: Free Press, 1949, p. 327.

(9) デュルケムの楽観的態度を、G・フリードマンは、次のように皮肉な調子で批判している。「デュル

ケムが「今日まで」生きていたならば、有機的連帯のテーゼを純粹のままに維持するために、現代社会において工業や行政や最近では商業(アメリカのスーパー・マーケットのことをここでは念頭においている)のなかで労働が取っている大部分の形態を、『異常な』ものだとみなさなければならなかっただろう。」Friedmann, G., *La thèse de Durkheim et les formes contemporaines de la division du travail*, dans *Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol. 19, 1955, p. 52.

(10) 《結節点》ということは、アンソニー・ギデンズから借用した。Giddens, A., 前掲訳書「一二二頁」。

(11) これは、デュルケムの死後、マルセル・モースによって、一九二一年に公表されたものであるが、そのモース自身が伝えるところでは、「一八九二年四月二日に、ボルドー大学で行われた「家族に関する講義」の最終章である。Mauss, M., *Présentation à Durkheim, La famille conjugale*, dans *Revue Philosophique de la France et de l'étranger*, vol. 90, 1921, p. 1. そしてこの講義録の存在はまた、『社会分業論』の初版の時点(一八九三年)ではまだ、デュルケムに同業組合論は生まれていなかったと見ることが、性急な解釈であることを示している。

(12) デュルケームの思想の中でも、この多元主義的発想ほど、他の諸思想と比較して論じられたものはあるまい。まず、イギリスの新自由主義者トマス・ヒル・グリーンと比較して「そのものとして」Richter, M., Durkheim's Politics and Political Theory, in Wolf, K. H. (ed.), *Emile Durkheim, 1858-1917—A Collection of Essays, with Translations and a Bibliography*, Columbus: The Ohio State U. P. 1960, pp. 194, 196-7, 202; Lukes, *op. cit.*, p. 271。ルークスはまた、トクヴィルとも比えている。Ibid. 他方折原浩はヘーゲルの同業組合論との類似を見ている。折原浩『デュルケームとウェーバー(下)』『三一書房』一九八一年、一三二、一三三頁。

他方、フランス独自のサンディカリスムの伝統の中に置き直そうとする論者も少なくない。とりわけブルードンにひきつける解釈を行なっているものとしては、Hayward, J. E. S., *Solidarist Syndicalism: Durkheim and Duguit, in Sociological Review*, n. s. vol. 8, 1960, p. 31; 作田啓一『人類の知的遺産57・デュルケーム』講談社、一九八三年、三六―七頁。ヘイワードはデュルケームに「連帯主義的サンディカリスム(solidarist syndicalism)」を見ている。佐々木交賢もデュルケームをサンディカリスムに接近させている。

佐々木交賢『デュルケーム社会学研究』、恒星社厚生閣、一九七八年、二二頁。

さらにモースは、デュルケームの同業組合論が、ソレルから革命的サンディカリスムに影響を与えたと言い放つてゐる。Mauss, M., *Introduction à Sociologie*, 1928, 2e éd. 1971, Paris: P. U. F., p. 28. しかしデュルケーム自身はこの思想に批判的だったので「[Sois]」この証言はやや疑わしいかもしれない。とはいへ彼の弟子たちは、師以上に革命的サンディカリスムに好意的であるように見受けられる。たとえば、Bouglé, C., *Qu'est-ce que la sociologie?* 1907, 牧野巽訳『社会学入門』、改造社出版、二四九、二五四、二五八頁。

(13) この意味では、デュルケームの思想体系を実証主義的アプローチから「主義主義的行動理論(voluntaristic theory of action)」への推移として捉えたパーンズの見解は、その限りでは正しいものであるように思われる。Parsons, *op. cit.*, pp. 396, 439-40, 448, 467.

(14) 以上の議論についてさらに詳細は、拙稿「デュルケームにおける『アスピラシオン』の概念」『社会学評論』一六四号、一九九一年、六二―七六頁を参照されたい。

(15) またこのことは、四つの実践プランが、見てきたように次々に継起しながら、しかも時期的に重複しあ



うことが少なくないという事実を、説明してくれる  
だろう。けれど、この実践プランの変遷は、単に時間  
的な移行というよりも、むしろ論理的な移行なのだか  
らである。

ニトシケームの著作の略号

DT: *De la division du travail social*, 1893, 10<sup>e</sup> éd.,

Paris: P. U. F., 1978.

EM: *L'éducation morale*, 1925, nouvelle éd., Paris:

P. U. F., 1963.

ES: L'éducation, sa nature et son rôle, dans

*Éducation et sociologie*, 1992, 4<sup>e</sup> éd., Paris: P. U.

F., 1980 [ΔΓΕΩ], pp. 113-30.

ES: Pédagogie et sociologie, dans ΓΩ, pp. 91-

112.

FE: *Les formes élémentaires de la vie religieuse*,

1912, Paris: Felix Alcan.

LS: *Leçons de sociologie*, 1950, 2<sup>e</sup>éd., Paris: P. U.

F., 1969.

RM: *Les règles de la méthode sociologique*, 1895, 7<sup>e</sup>

éd., Paris: Alcan, 1919.

SD: Détermination du fait moral, 1906 dans

*Sociologie et philosophie*, 1924, 4<sup>e</sup> éd., Paris: P.

U. F., 1974 [ΔΓΕΩ], pp. 51-83.

SD: Jugements de valeur et jugements de réalité,

1911, dans ΩΔ, pp. 102-21.

SS: Sociologie et sciences sociales, dans *La*

*science sociale et l'action*, 1970, Paris: P. U. F.

[ΔΓΕΩ], pp. 137-59.

SS: L'individualisme et les intellectuels, 1898,

dans ΩΩ, pp. 261-78.

SS: Internationalisme et lutte des classes, 1906,

dans ΩΩ, pp. 282-92.

SS: L'avenir de la religion. 1914, dans ΩΩ, pp.

305-13.

ST: *Le suicide*, 1897, nouvelle éd., Paris: P. U. F.,

1930.

(一橋大学大学院博士課程)